

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12472

研究課題名(和文) 終末期がん患者とその家族への意思決定支援に関する看護師の教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a nurse's educational program for decision support for end-of-life cancer patients and their families

研究代表者

岡本 双美子 (Okamoto, Fumiko)

大阪市立大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：40342232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、在宅終末期がん患者とその家族に対する英国と日本の訪問看護師意思決定支援の内容を明らかにすることである。対象である訪問看護師(近畿圏内の専門看護師・認定看護師6名と英国の訪問看護師10名)、合計16名に、半構造化インタビューを行った。その結果、特に英国の訪問看護師はツールを使用し、恐れることなく病気の理解とニーズを尋ねており、意図的にケアの早い段階から強調して実施されていた。この結果は、看護師の内部的な働きかけとツールの使用、学際的なサポートを提供することが重要であることを示唆していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在宅終末期がん患者とその家族への看取りに関する意思決定支援の内容について、訪問看護師(近畿圏内6名と英国10名)、合計16名を対象に半構成的インタビューを行い、「推し測る」「尋ねる」「説明する」「会話する」「待つ」「尊重する」ことを、日英で共通して行っていることが明らかになった。一方、英国では早期から積極的に残された時間の過ごし方の意思決定支援を実施していたが、日本では患者とその家族の様子をうかがい待っている時期があること等がわかった。この成果を基に教育プログラムを開発、実施することで、単身高齢者の多い大都市における意思決定支援の今後のあり方に有用な情報を提供できると考える。

研究成果の概要(英文)：This research's objective is to understand the UK and Japan 'district nurses' support for people with cancer and their families towards the end-of-life receiving home based care. Qualitative research design, with data collected using single semi-structured interviews. District nurse participants were recruited from one NHS setting in North West England and Kinki area in Japan. District nurses (n=16) had 3 to 20 years of experience as visiting nurses. All participants were female. As to the district nurses' support of decision-making for people with cancer and their families, ten categories were identified. In gauging, the timing to ask about end-of-life care was the first visit, early, after building relationships, and so on. They asked for disease understanding and needs without fear by having tools. Decision making was conscious and emphasized from early in their care. Our results suggest, that providing internal, tools and interdisciplinary support for nurses is important.

研究分野：在宅看護

キーワード：意思決定支援 在宅看護 アドバンス・ケア・プランニング 終末期がん患者 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

日本は、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行しており、団塊の世代が75歳以上となる2025年以降は、医療や介護の需要がさらに増加することが見込まれている。このため、厚生労働省は、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を推進している(厚生労働省, 2015)。重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう住まい・医療・介護・予防・生活援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現していくためには、その土台となる「本人・家族の選択と心構え」が重要となるとされている。

日本の死因第1位であるがんで考えると、がんと診断された時から、がん医療は意思決定の連続であり(近藤ら, 2006)、終末期に限定してもがん患者の意思決定には治療や療養の場、日常生活、人生の終結、治癒不可能ながんと付き合い方、社会的役割の維持に関する意思決定(八尋ら, 2010)と、多くの内容が挙げられている。

しかしながら、看護師は患者や家族の意思決定支援について、自信がないや援助方法が確立していないなど、看護師自身が意思決定支援を行えていないと感じている(太田, 2007)。具体的には、がん患者の意思決定支援で看護師が困難だと考えるケアには、最後まで自分らしく生きる支援や患者・家族がホスピス移行の決断をするための支援、家族が悔いを残さない看取りへの支援、療養環境の選択への支援、在宅に向けての支援など(小野, 2008)が報告されており、訪問看護の導入時期の遅れなど(奥村, 2013)に影響していると考えられる。

以上のことから、今後、住み慣れた地域で自分らしく過ごす地域包括ケアを推進するためにも、病院だけでなく、外来における終末期がん患者の意思決定を支えるケア(福田, 2008)や病院以外の在宅などの場での意思決定支援が急務であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、終末期がん患者とその家族への意思決定支援に関する看護師の教育プログラムの開発とその社会実装への可能性の検討である。具体的には、日本の訪問看護師を対象として、終末期がん患者とその家族への意思決定支援の内容の把握、英国の訪問看護師を対象として、終末期がん患者とその家族への意思決定支援の内容の把握、その結果と文献検討(海外での現状を含む)から、意思決定支援に関する看護師への教育プログラムの開発・社会実装の検討、である。

## 3. 研究の方法

終末期がん患者とその家族への意思決定支援の内容の把握：近畿圏内の訪問看護師を対象に、半構成的質問紙によるインタビューを行う。

英国における終末期がん患者とその家族への意思決定支援の内容の把握：英国北西部のLancashire Care NHS Foundation Trustに属する訪問看護ステーションで勤務している訪問看護師を対象に、半構成的質問紙によるインタビューを行う。

とでは、半構成的面接ガイドラインと個人特性調査票に基づいた面接によりデータ収集し、逐語録にして看取りに関する意思決定支援の内容を文脈単位で抽出、これに意味内容が損なわれないように名称をつけてコード化し、類似したものを集めてサブカテゴリー化、カテゴリー化した。研究の信頼性と妥当性確保のため、在宅看護の実践教育経験のある研究者・看護師と検討を重ねた。

終末期がん患者とその家族への意思決定支援に関する看護師への教育プログラムの開発：

との結果や文献検討(海外の現状を含む)などから開発する。

## 4. 研究成果

対象は6名、平均年齢47.7歳、全員が女性、認定看護師または専門看護師で、在宅終末期がん患者と家族への看護経験は10.3年であった。在宅終末期がん患者と家族の看取りに関する意思決定支援として、<退院前後の早い段階で在宅療養の意向を確認する><病状変化時や変化を自覚した時に在宅療養の意向を確認する><普段から在宅療養の意向を確認する><病状と今後の予測に関する理解を促す><悔いのない選択ができるように揺れる気持ちを支える><最善の選択ができる力を信じて支える><その人らしく生きられるように多職種で支える><早期からの支援ができるように準備をする>の8カテゴリーが抽出された。

これらの結果から、日本における在宅終末期がん患者と家族の看取りに関する意思決定支援は、退院前や退院直後、病状変化時や体調変化を自覚した時というタイミングだけでなく、普段から話をする中で何度も行われていることが明らかになった。また早期から患者・家族の揺れる気持ちを理解して丁寧に行われており、在宅終末期がん患者の特徴に合わせた介入が重要であることが示唆された。

対象は10名、全員が女性であった(Table 1)。看護師経験年数は4~36年、訪問看護経験

年数は 3～20 年であった。英国における在宅終末期がん患者と家族の看取りに関する訪問看護師の意思決定支援の内容は、「Gauging」「Asking」「Explaining」「Discussing」「Waiting」「Respecting」であり、日本の結果と同様のカテゴリーが抽出された (Figure 1)。

以上のことから、英国では早期から積極的に残された時間の過ごし方の意思決定支援を実施していたが、日本では患者とその家族の様子をうかがうように待っている時期があることなどが明らかになっている。

Table 1 : Characteristics of participants

	Age	Gender	Academic history	Position	Years as a DN	Years in nursing
A	58	female	BSc DipHE	Sister	15	20
B	29	female	BSc	CSP St.	3	4
C	54	female	DipHE	CSP St.	16	19
D	29	female	DipHE	CSP St.	3	4
E	48	female	Master	Manager	19	30
F	29	female	DipHE	CSP St.	4	8
G	54	female	BSc DipHE	Sister	20	36
H	39	female	DipHE	CSP St.	6	9
I	37	female	Master	Manager	6	15
J	41	female	BSc	CSP St.	14	17

Figure 1 : District nurses' support of decision-making for people with cancer and their families



今後は、緩和ケア先進国である英国における訪問看護師の意思決定支援を参考に日本における在宅終末期がん患者とその家族への訪問看護師の意思決定支援に関する教育プログラムの開発、実施を行う予定である。

< 引用文献 >

福田裕子(2008) : 外来における終末期がん患者の意思決定を支えるケア, 看護実践学会誌, 20 巻 1 号, 107-112

厚生労働省 : 地域包括ケアシステム ( 2015 ) ,

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/kaigo\\_koureisha/chiki-houkatsu/](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiki-houkatsu/)

奥村美奈子(2013) : A 県における終末期がん患者在宅療養支援体制の課題, 岐阜県立看護大学紀要, 13 巻 1 号, 103-113

太田浩子(2007) : 告知を受けたがん患者の治療選択における看護師の役割に関する研究(第 2 報) 看護師へのアンケート調査より, 看護・保健科学研究誌, 7 巻 2 号 155-164

八尋陽子, 秋元典子(2010): ターミナル期にあるがん患者の自己決定を支援する看護研究の概観  
と今後の研究課題 対象文献を和文献に限定して, 日本がん看護学会誌, 24 巻 1 号 69-74

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Fumiko Okamoto, Catherine Walshe, Tomoko Lewis
2. 発表標題 District nurses' support for people with cancer and their families, in relation to decision-making for their end-of-life care plan in UK: a qualitative study
3. 学会等名 The 6th International NURsing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平松瑞子, 岡本双美子
2. 発表標題 在宅における終末期がん患者と家族への看取りに関する訪問看護師の意思決定支援
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 平松瑞子・岡本双美子
2. 発表標題 在宅における終末期がん患者と家族への看取りに関する訪問看護師の意思決定支援
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小泉 亜紀子  (Koizumi Akiko)  (60822559)	大阪府立大学・看護学研究科・助教    (24403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Lancaster University			